

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02676

研究課題名(和文) チュルク諸語の動詞複合体についての記述的・理論的研究

研究課題名(英文) A Descriptive and Theoretical Study of Verbal Complexes in the Turkic Languages

研究代表者

栗林 裕 (KURIBAYASHI, YUU)

岡山大学・社会文化科学学域・教授

研究者番号：30243447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はトルコ語をはじめとするユーラシア大陸全域に分布しているチュルク諸語における動詞複合体(複合動詞)の語形成のパターンを精査し、そのバリエーションを明確に提示すると共に、同じアルタイ型言語といわれている言語タイプの中で、なぜ複合動詞のバリエーションに差異が見られるのかについての考察を行なった。全研究期間を通しての重点項目として以下の3項目を掲げて研究を実施した。1)現地調査に基づく記述的資料、2)文献調査に基づく歴史的資料、3)言語理論の知見に基づく理論的アプローチ。以上の項目について総合的な視点からトルコ語及びチュルク諸語に見られる動詞複合体の全体像の解明を目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主な成果：1)コソボ・トルコ語に関する記述的研究、2)ウイグル語の動詞複合体に関する理論的研究、3)チュルク諸語と日本語の複合動詞の対照に関わる研究、4)事態把握表現の補助動詞の数量化に関わる類型論的研究、5)チュルク諸語の動詞複合体に関連する研究を専門書としてまとめて出版、6)トルコ語とその文化的側面も含めた大学生向けの教科書の出版、7)日本のトルコ語およびチュルク語教育の発信による社会的貢献

研究成果の概要(英文)：This study examined the patterns of word formation of verbal compounds (compound verbs) in Turkic languages distributed throughout the Eurasian continent, including Turkic languages, and clearly presented the variations of these compounds, and examined why there are differences in the variations of compound verbs among the same language type known as Altaic-type languages. We also examined why there are differences in the variation of compound verbs among the same Altaic-type language types. The research was carried out with the following three main focuses: 1) descriptive data based on field research, 2) historical data based on document research, and 3) a theoretical approach based on linguistic theory. From a comprehensive perspective on the above items, we aimed to elucidate the overall picture of the verbal complexes found in Turkic languages and the Turkic languages.

研究分野：言語学

キーワード：トルコ語 チュルク諸語 ウイグル語 補助動詞 複合動詞 アルタイ型 ナル的表現 トルコ語教育

1. 研究開始当初の背景

チュルク諸語とは、最大の話者数を持つトルコ語をはじめとするユーラシア大陸全域に分布しているアルタイ諸語のチュルク語派に属する諸言語で、母語話者の総数は一億七千万人程度とみなされている。チュルク諸語の文法構造はいわゆるアルタイ型と呼ばれ、つぎつぎと文法的意味を持つ接辞が連なる膠着的形態構造を持つことや述部末尾の語順や修飾部の後に被修飾部が続くといった日本語と類似した文法構造を持つことでよく知られている。複合動詞の成立は、述部末尾語順というアルタイ型言語の特徴との相関を連想させるが、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語といった同じ統語法を持つ言語でありながら、V+V型の複合動詞のバリエーションは地理的に西方に行くに従って、貧弱なものになっていく。このような中で、トルコ語と日本語の複合動詞間に見られるこのようなバリエーションの異なりについての理論的な分析を行い、国際学会で海外に向けて積極的に発信し、成果の検証を行ってきた。本研究では、チュルク諸語全体を対象にすることにより、その中でもバリエーションが見られることを指摘し、その要因を探ることを目的としている。

2. 研究の目的

本研究はトルコ語をはじめとするユーラシア大陸全域に分布しているチュルク諸語における動詞複合体(複合動詞)の語形成パターンを精査し、そのバリエーションを明確に提示すると共に、同じアルタイ型言語といわれている言語タイプの中で、なぜ複合動詞のバリエーションに差異が見られるのかについて、1)現地調査に基づく記述的資料、2)文献調査に基づく歴史的資料、3)言語理論の知見に基づく理論的アプローチなどによる総合的な視点からチュルク諸語に見られる複合動詞の全体像の解明を試みるものである。その研究の過程は、今まで研究が手薄であったバルカン半島のチュルク諸語極小方言の最新の状況の記述的調査や動詞複合体に関する研究がほとんど見られないオスマン・トルコ語に見られる文献学的調査の実施を含む。

3. 研究の方法

調査項目は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所作成の基礎語彙集(言語調査票)に主に基づきながら、必要に応じてイスラム文化圏に適したものに修正しつつ利用する。音声はリニアPCMレコーダーを用いデジタルデータ化して保存する。特に着目している点は、コソボ・トルコ語がスラブ系言語の影響のもと、他の語彙項目の状況と共に統語法の変化がどのように複合語形成に影響を与えて、どのような状況に至っているかという問題である。特にコソボ・トルコ語は語彙的に古い形式を保っているとされ、複合動詞構造の記述と共に、変容しつつある文法と語彙に関する全体的な記述データを収集する。伝統的な言語の記述的研究では、対象言語の音声の精緻な記述と分析を基礎とし、そこから形態構造への積み上げを行なう。本研究では、これらと平行して母語話者との直接面接を行い、複合動詞構造などの特定の言語構造の文法的容認可能性についての情報を含む例文調査によるデータ収集を行う。タタール語では、動詞のそれぞれに否定接辞が付加されるといってさらに西方のトルコ語には見られない動詞複合体の存在が確認されており、またそれがウイグル語にも見られるかどうかを確認するためにも例文調査を実施する。

4. 研究成果

研究期間内に得られた主な成果は以下のような項目にまとめることができる。

(1) コソボ・トルコ語に関する記述的研究

バルカン・トルコ語は西ルーム・トルコ語と東ルーム・トルコ語に分割される。マケドニアとコソボやアルバニアのトルコ語は前者に属する。本研究では、コソボ・トルコ語話者の語彙調査を行なった上で、音声、形態、統語的特徴を中心に、先行研究で指摘のあった項目の再確認と先行研究に指摘がない特徴を探求することを目的とする記述的調査を行なった。形態的側面では複数形接辞のペアー用法や女性形接辞の存在は近隣の言語であるアルバニア語やセルビア語からの影響であること、関係詞の翻訳借用や修飾名詞句の後置などはガガウズ語にも確認ができる事項であることがわかった。また接続詞やモーダル形式の翻訳借用なども広くみられることがわかった。これらもまたガガウズ語にも確認ができる事項であり、バルカンエリアには、接触により生じた形態・統語的特徴の集束地帯が広がっていることがわかった。

(2) チュルク諸語に見られる複合動詞の対照研究に関わる研究

本研究では、V-V(動詞前項-動詞後項)複合体のうち、動名詞型と動詞連結型の2種類に注目し、二項構造と単項構造を持つウイグル語とトルコ語を比較すると、ウイグル語では動詞連結型が、トルコ語では動名詞型が優勢であるという顕著な違いが浮かび上がってきた。ウイグル語では動詞連結型のV-V複合体が多く使われているが、これはインド・アリア諸語に多く

見られる explicator(または vector)動詞の地域的な言語的特徴を反映している。その結果、ウイグル語では動詞複合体の文法化がしばしば見られるが、トルコ語では動詞連結による動詞複合体を起源とする連結接尾辞が文法化される例はない。しかし、V-V 複合体の本来の枠組みが常に安定しているわけではなく、言語接触によって容易に損なわれる可能性があることを指摘した。

(3) 補助動詞 ol- 「なる」などの事態把握表現の数量化に関わる類型論的研究

言語事態を自動詞的に捉えるかという観点からの分析は、スルの表現とナル的表現の対立として日本語では広く議論されてきた。事態を自動詞的に変換する働きをナル補助動詞が担うので、それに相当する ol- や bol- の形式をもつチュルク諸語において自動詞的把握という概念が適用可能かどうかを検証するための重要な材料になりうる。しかし、従来の研究では、これらの補助動詞の意味的機能についての記述はあるが、実際にどのぐらいの頻度であらわれるのか、チュルク諸語内でそのあらわれ方はどのように異なるのかという観点からの分析はなかった。その理由の一つとして、比較をするための客観的基準がなかったことがあげられる。本研究では、チュルク諸語内のいくつかの言語で、ナル的事態把握表現の出現頻度を客観的に比較するためにカッパ係数を用いた方法を新たに提案した。

(4) チュルク諸語の動詞複合体とそれに関連する研究をまとめた単著の出版

本研究に関連する執筆項目として、次のような内容を含む。

第二部 トルコ語と日本語の対照研究

4 章 トルコ語と日本語における語彙の意味的差異

5 章 トルコ語の ol- 表現と日本語のナル表現の対照研究

第三部 チュルク諸語の研究

6 章 トルコ語、古代トルコ語およびハラジ語における使役/反使役の交替

7 章 トルコ語、チュルク諸語および日本語における主語と主題

8 章 ガガウズ語を話す人々

9 章 バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語

(5) トルコ語とその文化的側面も含めた大学生向けの教科書の出版

本書は、本研究成果を広く社会に発信することを目指したものであり、次のような章から構成されている。

1 章 トルコ語を話す民族とその分布を知る

2 章 トルコ語とチュルク系諸言語の歴史を知る

3 章 トルコ語の音声と文法を知る

4 章 チュルク諸語での『星の王子様』

5 章 トルコ語を日本語と対照させて分析する

6 章 トルコの若者言葉の現在

7 章 日本語を学ぶトルコ語話者の音声と文法の特徴

8 章 辺境の地のチュルク語

9 章 トルコの言語と文化についての読書案内

本研究期間の全体を総括すると、コロナ禍により調査や研究成果の発表のための海外渡航を中断せざるを得なくなると当初予期されなかったことがあったが、オンラインによる講演会や研究会において、研究内容の積極的な発表を行なった。また、動詞複合体の文法現象を含むチュルク諸語を言語教育と関わらせながら論じることにより、研究成果の応用的な側面についても公開した。特に日本におけるトルコ語をはじめとするチュルク諸語研究の過去からの蓄積と現状とその問題点を国内外に対して発信した。トルコをはじめとして米国で開催された国際学会やテレビプログラムや一般社会人向けの講演会からの招聘があったのは関心の高さを示している。

今後の研究の展望として、以下の項目をさらに継続していきたい。

(1) 動詞複合体の一部である補助動詞 ol- などによる事態把握表現に関わる類型論的研究のための数量化の方法論を精緻化すること

(2) チュルク系諸言語間において共通するテキストの翻訳を通して表出される言語特徴を教育教材としての活用すること

(3) 日本語やチュルク諸語の歴史的資料を参照ながら、複合動詞形成一般の歴史的側面をさらに新しい観点から分析していくこと

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 6
2. 論文標題 Turkish textbooks used in Japan and related problems.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Teaching Turkish and Turkic Languages during the Pandemic: Past, Present and Future Directions	6. 最初と最後の頁 219-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 -
2. 論文標題 CLAUSAL STRUCTURE OF VERB-VERB COMPLEX IN UYGHUR AND TURKISH.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 A LIFE DEDICATED TO THE TURKIC WORLD: A GIFT FOR THE 60TH ANNIVERSARY OF PROFESSOR JULIBOY ELTAZAROV.	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗林裕	4. 巻 23
2. 論文標題 「チュルク諸語の事態把握表現の数量的比較に向けての試論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages series	6. 最初と最後の頁 65-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 1
2. 論文標題 Turkish and Uyghur verb-verb complex in contrast.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Verb-Verb complexes in Asian Languages.	6. 最初と最後の頁 455-470
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫爽, 栗林裕	4. 巻 2
2. 論文標題 日本語の連体修飾表現の習得についての一考察 中国語及びトルコ語母語話者を対象に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗林裕	4. 巻 177
2. 論文標題 第10章 トラカイで守られているチュルク系カライム語 (分担執筆)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『リトアニアを知るための60章』	6. 最初と最後の頁 73-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗林裕	4. 巻 20
2. 論文標題 トルコ語の数量詞遊離について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages series	6. 最初と最後の頁 307-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 114
2. 論文標題 Verb-Verb compounding in Turkish.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Rouen Meeting: Studies on Turkic Structures and Language Contacts.	6. 最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 13
2. 論文標題 Topic marking in Iranian Turkic.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAF13)	6. 最初と最後の頁 179-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗林裕	4. 巻 21
2. 論文標題 バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語 カライム語とガガウズ語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 31-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 -
2. 論文標題 Chapter 7: Verb-Verb compounding in Japanese and Turkish.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics.	6. 最初と最後の頁 227-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Yuu	4. 巻 -
2. 論文標題 SUBJECT AND TOPIC IN TURKISH, TURKIC, AND JAPANESE.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Prof. Dr. Talat Tekin Hatira Kitabi.	6. 最初と最後の頁 661-677
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuribayashi, Y., Tamaoka, K. and Sakai, H.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Psycholinguistic investigation of subject incorporation in Turkish.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Uppsala Meeting	6. 最初と最後の頁 144-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計29件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Japonlara Turkce Ogretiminde Zor Olan Bazi Ifade ve Kelimeler.
3. 学会等名 6th International Symposium of Limitless Education and Research (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 「言語表現のタイプの対照研究 -トルコ語と日本語-
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Japonya ' da Kullanilan Turkce Ders Kitaplari.
3. 学会等名 5th International Symposium of Limitless Education and Research (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 「トルコ語における進行表現の文法化のソースについて チュルク諸語内での位置づけ 」
3. 学会等名 第16回言語類型対照研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 「チュルク諸語の分布と進行表現の展開」
3. 学会等名 第141回トプカプさろん（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Turkish textbooks used in Japan and related problems
3. 学会等名 6th American Association of Teachers of Turkic Languages (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 「トルコ語と日本語の翻訳小説にみられる主題について」
3. 学会等名 2021 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Cesitli Ulkelerde Turkce Ogretimi: Japonya
3. 学会等名 4th International Symposium of Limitless Education and Research (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗林 裕
2. 発表標題 チュルク諸語のol-/bol-補助動詞の数量的比較 - トルコ語、ウズベク語、アゼルバイジャン語の翻訳テキストから -
3. 学会等名 第4回東京外国語大学AA研チュルク諸語研究会 (Online)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栗林 裕
2. 発表標題 チュルク諸語の事態把握表現の数量的比較に向けての試論
3. 学会等名 2020 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」(Online)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 孫爽, 栗林裕
2. 発表標題 日本語の連体修飾表現の習得についての一考察 中国語及びトルコ語母語話者を対象に
3. 学会等名 関西言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 「トルコ語のナル表現 - トルコ語版 創世記から - 」 ワークショップ
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Numeral Quantifier Floating in Turkish and Uyghur.
3. 学会等名 19th International Conference on Turkish Linguistics. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 チュルク語の主題の構造と機能
3. 学会等名 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 チュルク諸語の動詞複合体
3. 学会等名 言語学セミナー ~日本語研究に寄与するチュルク語派言語の諸研究について~
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 チュルク諸語の動詞複合体のタイポロジー
3. 学会等名 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Topic marking in Iranian Turkic
3. 学会等名 The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語 カライム語とガガウズ語
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 「ナル表現」をめぐる通言語学的研究 日本とユーラシアの「ナル表現」 : トルコ語
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Karslastirmali Dilbilim Bakis Acisiyla Turkcede Ol- Fiili.
3. 学会等名 Uluslararası Turk Dili Konusan Ulkeler Kurultayı (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Topic and Related Constructions in Turkic
3. 学会等名 International Symposium: Current Topics in Turkic Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 トルコ語の数詞句
3. 学会等名 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第4回公開発表会・兼「数詞句の構文的性格」を考える国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 コンボ・トルコ語方言についての覚書
3. 学会等名 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Turkiye Turkcesi ve Cagdas Turk Lehcelerinde Iki Unsuru Fiilden Olusan Birlesik Fiiller.
3. 学会等名 Dil Bilimi Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Karsilastirmali Dil Bilimi -Turkce ve Japonca-.
3. 学会等名 Dil Bilimi Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kuribayashi, Yuu
2. 発表標題 Japonya ' da Turkoloji Calismalari.
3. 学会等名 Japon haftasi (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 カシュカイ語の主題とその構文的特徴
3. 学会等名 言語の類型的特点をとらえる対照研究会第3回公開発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 トルコ語のナル表現について
3. 学会等名 類型論を視野に入れた『ナル表現』研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗林裕
2. 発表標題 トルコ語の数量詞遊離
3. 学会等名 2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 栗林 裕	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岡山大学出版会	5. 総ページ数 140
3. 書名 トルコ語話者の言語と文化	

1. 著者名 栗林 裕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日中言語文化出版社	5. 総ページ数 189
3. 書名 トルコ語とチュルク諸語の研究と日本語との対照	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔Webページ〕

<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~kuri/>
<https://www.lib.okayama-u.ac.jp/up/publications/book73.html>
<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~kuri/hp/book-index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------